

個が生きる音楽科の授業

1年生の実践を通して

井坂雅浩

1. 個が生きる低学年の音楽科授業

低学年の子どもは、歌ったり、曲に合わせて体を動かすことを好む。曲に合わせて自然に動いたり、いっしょに歌ったりすることも多い。しかし、無理やり歌わされたり、表現させられたりすると、音楽が嫌いになったりすることさえある。反対に、「気持ちがいいな」「この曲は楽しいな」と思うときや、先生にほめられたり友だちに認められたりすると意欲的に表現しようとする。

子どもが、心から感じることなしには、よい表現もあり得ないし、意欲やめあても持つことはできないと考えるのである。

ただ、1年生の子どもは、いいなと思うことや音楽のどんなところがすてきだなと思っているのかを、効果的に言葉で表現することができない。表現するイメージがあっても「こんなふうに歌ってみたい。」などと、自分の言葉で表現できる子どもは少ない。そのため、子どもが心で感じているであろうことを、教師は、子どもの表現や動きから見抜いていくことが必要となる。

また、楽しいがゆえに、思わず動き回ったり教室を走り回ったりするのも1年生である。その動きも、音楽経験が少ないために、拍に合っていないなかったり音楽的でなかったりすることもしばしばである。よりよい表現になるよう、動いてはいけないと規制するのではなく、その動きを拍やリズム・音の高低・強弱やテンポの速い遅いなどの音楽の要素に合わせた身体反応（表現）につながるよう、教師が指導していくことが大切である。このような経験を積み重ねていくことで、よりよい表現になると考えるのである。

さらに、1年生の子どもは、歌っても奏しても自分がどんな声や音を出しているのか客観的に聴こうとしたり、自分を客観的に観ることは難しい。表現や態度についての、教師の適切で具体的な評価が必要である。自分や友だちがどんな表現をしているかを認識するために、リレー唱やリレー奏・リズムあそびやドレミあそびなどで、いつも全体でやるのではなく一人で表現することはきわめて重要である。もちろん、一人ひとりの表現に対してどんな点でもよいからことばかけをするなど、必ず認めたりほめたりすることが大切であることは言うまでもない。教師の肯定的な評価を手本として、友だちどうして評価できたり、自己評価できる力にもつなげていきたい。

2. 個が生きる授業の条件

(1) 安心して自分を出せる学級の人間関係を育てる。

学級における音楽科の学習は、常に他（教師や友だち）と関わり合う中で音楽活動していくという特性を持っている。自分の歌声や演奏を常に自分で評価したり、あるいは他人に評価されながら活動する。また、学級全体やグループで1つの表現をねり上げる活動も多い。そこでは協力、支持、容認が求められる。従って、自分の思いや感じ方を素直に表現できるような、安心感のある、協力的な、信頼感の持てる人間関係を形成する必要がある。

1年生において、そのような学級をめざして育てていく手だての一つとして、授業に限らずあらゆる機会を通じて、一人ひとりの子どもの良さをほめ認めていくことによって、子ども一人ひとりに、自分は先生に認められているという安心感を与え、教師と子どもの信頼関係を築いていくことが不可欠である。なぜなら、1年生の子どもは、自己中心性が強く、自分には甘く他人に対し

ては非常に厳しいという特徴がある。裏を返せば、それだけ自分を認めてもらいたいという欲求が強いということである。自分は認めてもらっているという安心感がなければ、自分以外の子どもがほめられても、なかなかそれを肯定的に認めようとはしないし、ましてや自分から他人の良いところを認めていこうという意識は育てられないからである。

(2) 良く聞くことのできる学習規律作り。

一学期から音楽の授業に限らず、先生や友だちの話を聞くときは、「目で聞く」「心で聞く」ということで、話し手の方を向いてじっと聞くことを指導してきたのだが、今現在、そのような子どもに育ってきているのはクラスでもまだ小数である。じっくり聞くという活動があってはじめて、個が認められ、個の多様性に気づくことができる。とりわけ音楽の授業は、声や音を注意深く聴かせ、表現の違いを聴き分ける力（鑑賞力）を育てていかなければ、よりよい表現をする力も育たない。これまでの取り組みが手ぬるかったことを反省すると共に、じっくり聞かせることの重要性を痛感している。今後も一層努力したい。

(3) 個をとらえるための手だてを持つ。

児童の音楽経験、音楽に対する関心、音楽の感じ方、表現技能には個人差がある。個が生きる授業作りをするためには、個々の子どもの音楽性の把握が不可欠である。これまでの音楽経験や表現技能は客観的にとらえやすいが、表現に表れにくい内面の感じ方や、個の中での変容にも注意を向ける必要がある。そのためには、観察法による座席表への記録、評価の記録等、できるだけ深く子どもを理解する手だてを持たなければならない。それが、個に応じ、個に対応した授業として成立すると考えるからである。

つまり、各自の持っている個人差を解消することの指導と、個人差を生かした指導を行うことの両面が考えられなければならない。

従来、鍵盤楽器などの演奏において、できる・できないといった技能的なことは目につきやすく指導にも力が入れられてきたし、評価の大部分もこのことで占められていたのではなかろうか。もちろん、各学年の基礎・基本の事項の修得は重要視していくが、もう一方の、個々の生活経験の違い・音楽に対する興味・関心・意欲・態度、多様な発想を価値ある個性へと位置づける場所の、個人差を生かす指導を忘れては、個が生きる授業にはつながらない。

(4) 魅力的で、幅広い音楽性を培うための教材を用意する。

音楽へのアプローチの方法は一つとは限らない。この歌が歌えなければ音楽を楽しめない、この音楽で曲が演奏できなければ音楽に親しめない、とは考えていない。音楽活動は多様で幅広い。さまざまな特性や個性を持つ子どもに対応できるような教材を題材として学習活動を構成していきたい。そこで教材選択の条件として、次の諸点を考えている。

- ・子どもの発達段階に即していること。
- ・子どもがめあてを持って音楽性を追求できること。
- ・活動の結果として、表現力や鑑賞力などの音楽性が育てられること。
- ・音楽活動に対する満足感や達成感が味わえること。

(5) 向上が意識できる評価の場を設定する。

音楽科において、児童の学習意欲は、その指導過程における評価活動に深い関わりを持っている。認められることは、喜びや自信にもつながり、またやってみようという意欲も引き起こす。

また、適切な評価活動をするためには、明確な評価の観点が必要である。さらに、できた・できないという技能的な面や態度面からのみ評価するのではなく、「こんな声は曲の感じにあっている」とか「もっと強さや弱さの変化をつけた方が美しい」とかいった音楽的な価値の深まる評価の場を設定したい。このような評価は、できたかどうかという技能的な評価に比べて、個々の感じ方や聴

き方、イメージなどによって違いがみとめられると考えられる。その違いをお互いに出し合い、感じ合う中で、互いの音楽性を認め合わせたい。

3. 指導事例 1年「リズムにのって」の実践を通して

(1) 実践にあたって

① 題材について

本題材では、拍にのってリズム遊びをしたり、曲に合わせてリズムを打ったり、体を動かしたりする活動をさせる。それにより、既出の「 $\text{♪}|\text{♪}|\text{♪}||$ と $\text{♪}|\text{♪}|\text{♪}\text{♪}||$ に $\text{♪}\text{♪}|\text{♪}\text{♪}||$ のリズムフレーズを加え、二拍子のリズム感やフレーズ感を養っていききたい。

教材曲としては、「しろくまのじぇんか」と「かたつむり」を使う。「しろくまのじぇんか」はジェンカのステップのリズムが、この学習主題そのものであり、身体表現を中心に楽しく学習することができる。「かたつむり」は三つのリズムフレーズを自然に感じ取らせることのできるという点で大変よい曲である。しかし、やや乱暴な歌い方になりがちな曲であるが、曲の味わいは、かたつむりにやさしく話しかけたり元気づけたりする、はずんだ中にもやわらかさの要求される歌であるので、入学以来元気な歌声で歌い続けてきた子どもたちにとって、かたつむりへの子どもらしい愛情を歌った本題材は、歌詞の内容を考えた歌い方、どのような歌い方を指導するのにも適している。

② 授業設計の焦点

「リズムにのって」ということは、まずその基盤に「拍の流れにのって」ということが前提としてなければならないと思う。つまり、「リズムフレーズの拍の流れ」を感じる中での「リズムカルな歌であり、合奏」をさせたい。そのために、三つ打ち（ $\text{♪}|\text{♪}|\text{♪}\text{♪}$ ）の基本リズムをもとに、リズム遊びやことば遊びなど即興的に表現する活動をさせる場や手拍子によるリズム打ちだけでなく、足と体を使って全身で音楽を表現させる場を設け、リズム感やフレーズ感を養いたい。

また、「小さいかたつむりに歌でお話しましょう。」とかたつむりさんに呼びかける気持ちで歌うことを意識づけさせ、柔らかい声で、きれいな歌い方に気づかせていきたい。

③ 本時の目標

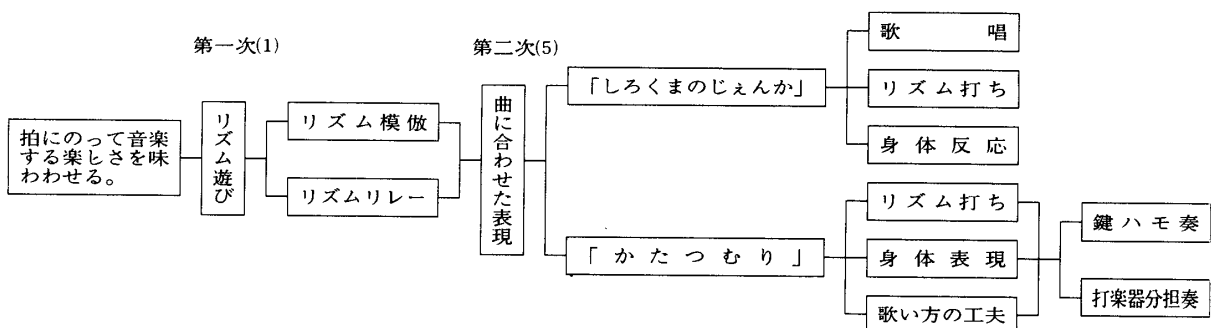
リズムにのって、歌ったり、体を動かしたりさせる。

(2) 実践の概要

① 指導目標

- ア. 体を使って音楽する楽しさを味わわせる。
- イ. 拍にのったりリズム遊びをさせる。
- ウ. どのようなで明るくリズムカルに歌う歌い方に慣れさせる。
- エ. 打楽器に親しませ、分担奏をさせる。
- オ. 鍵盤ハーモニカで属音のリズム奏やソ・ファ・ミの旋律奏をさせる。

② 指導内容と計画……………6時間（本時 第二次 第3時）



- ③ 指導の実際
 ア 準備 かたつむりの絵
 イ 指導過程

学 習 過 程	指 導 上 の 留 意 点
<p>1. リクエスト曲を歌う</p> <pre> graph TD A[リクエスト曲を歌う] --> B[季節の歌] A --> C[楽しい歌] B --> D[リズム遊びをする] C --> D D --> E[リズム模倣] E --> F[「かたつむり」を歌う。] F --> G[リズム打ち] F --> H[身体表現] F --> I[声の感じ] G --> J[「しろくまのじえんか」で遊ぶ。] H --> J I --> J J --> K[拍の流れ] J --> L[身体反応] </pre>	<p>1. 音楽学習の雰囲気をつくるために、できるだけ毎時間位置づける</p> <p>歌は、歌集の中から男女ペアの順番でリクエストさせる。</p> <p>2. 前時に学習を想起させるとともに、本時の学習にスムーズに導入するために、次の点に留意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「♪」のフレーズ感が体得できているか。 ・拍にのっているか。 <p>3. ♪と♪の違いを、手や足を使って体感させ、リズムや拍にのって歌わせる。曲想にあった歌い方をさせるために、「かたつむりにやさしく話しかける」部分や、「かたつむりを元気づけてやる」部分があることに気づかせ、どんな歌い方が曲に合うか歌い方を工夫させる。</p> <p>4. 拍の流れに乗って身体反応させる。上手にできている子供をほめ、どんなのがよいのかを具体的に意識づけさせ、楽しくジェンカをさせる。</p>

4. 授業の概要

T：今日のリクエストは、O君とYさんですね。なんの歌にしますか。

O：「勇気ひとつを友にして」です。 Y：「アブラハムの子」です。

—— 教師のオルガンの伴奏に合わせて、「勇気ひとつを友にして」を歌い始める。立ち上がって腕を広げたり、腰に手をあてるなどふりをつけたたり、「落ちて 命を 失った」のところでは、椅子の上から床に飛び降りる子など、動きはさまざまであった。子どもたちは、人気テレビアニメの「セイント星矢」とイメージがオーバーラップするらしく、大変この歌を好んで歌っている。——

T：Hさんは、口も目も大きく開けてはっきりした声で歌っていたね。いい声が聴こえてきましたよ。M君は、前奏のところからオルガンに合わせて体でリズムをとっていました。よくオルガンの音を聴いていたね。みんなも、イカロスになってかっこよかったよ。

次は、「アブラハムの子」だったね。

C：先生、おどってもいいですか。Cn：おどりたい、おどりたい。

T：いいでしょう。歌を歌いながらですよ。

— 子どもは、おどりに懸命になると思われたので、教師がオルガンを弾きながらしっかり歌ってやった。ところが歌の終わりごろで、二人の男児が、手があたった。足で蹴った。という事で喧嘩になったので、仲裁に入らなければならず、歌の評価ができなかった。—

T：|♪♪♪♪||のリズムフレーズで、|♪♪♪♪||、|♪♪♪♪||、|♪♪♪♪||などのバリエーションのリズムを手で打つ。

— リクエストのうたが、2曲とも活動的な曲だったことと、トラブルがあったことで最初はやや騒然としていたが、次第にリズム模倣の活動に乗ってきたころをみはからって、アクセントの変化をつけたり、指先で音をたてないでリズムを打ったり、頭の上や上から下へ手を動かしながら打つなど、音の変化や視覚的な変化をつけながら打った。「かたつむり」の歌の中に、♪と♪が出てくるので、意図的にそれらのリズムをまぜて打ってみた。

T：Kさんは先生そっくりに打っていましたね。とても感心しましたよ。上手だったので、こんどはKさんに先生の役をやらせてもらって、みんなでそれをまねしてみましよう。

Ck：|♪♪♪♪||と|♪♪♪♪||の二つのリズムを打つ —リズム模倣・評価略—

T：今日は、みんなの教室にかわいいかたつむりさんが遊びにきてくれましたよ。—黒板にはっぱの絵を描いて、その上にボール紙で作ったかたつむりを乗せた。—

みんなで「かたつむり」の歌を歌って、このかたつむりさんとお友達になりましよう。

歌唱：大変元気のよい、中には怒鳴ったような声で歌う児童もいた。

T：かたつむりさんはみんなよりとってもちっちゃいね。今みたいに大声で歌ったら、びっくりして目を引っ込めてしまいますよ。と言って、かたつむりの目をまげて隠す。

Cn：あーあ。

T：やさしくお話するように歌ってあげようね。

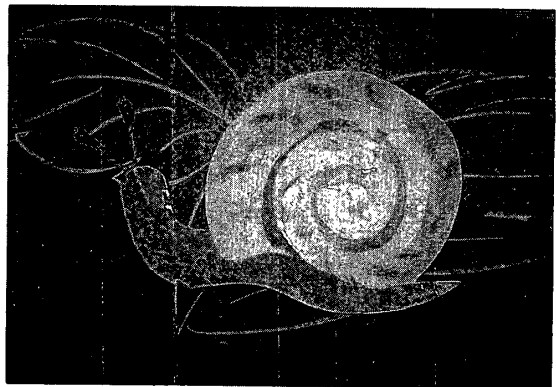
歌唱：怒鳴った感じはなくなったが、まだ乱暴な歌い方であった。

T：かたつむりさんに聞いてみるよ。

「みんなの歌は、気に入りましたか。」

まだ、びっくりしているようですね。

T：こんどは、みんなもかたつむりになってみましよう。始めに、男の子がかたつむりになって、女の子が歌います。かたつむりが安心してつのや目を出すように歌おうね。



目が光った！



かたつむりさんになーれ

T：男の子は、かたつむりになーれ。

—— 中 略 ——

T：I君のかたつむりは、歌に合わせて角や目を出していたね。

T：先生は、とてもやさしく歌えていると思うけど、みんなはどう思いますか。

C：「つのだせ やりだせ……」のところは、おおきくうたったほうがいい。

T：なるほど、そこは、かたつむりさんを元気づけてあげるところなんですね。

T：よく考えましたね。先生もいいと思います。

さあ、つのだせ、やりだせと励ましてあげるように歌ってみましょう。

歌唱：身体反応しながら上手に歌う。

T：上手だったねー。かたつむりさんも喜んだようですよ。と言って、足のところのスイッチを押して豆電球で作った目を光らせた。

—— 「やらして！ やらして！」と言って、子どもたちが黒板のところに殺到したので、後の活動がストップした。



つのだせ やりだせ

5. 反省と考察

低学年の研究授業にいくと。授業後の協議会などで、授業の内容はともかく学級経営のことばかり協議の対象となることが多い。それだけ、「聞く」・「話す」という基本的な学習規律作りが大切であるということなのであるが、今年はずじめて1年生を担当した私にとっても、それが個を生かす授業・子供がめあてを持って学習することにとって不可欠なものであることを痛感している。

本時の授業も、リクエストの歌が2曲とも活動的な曲であったということもあって、最初から騒がしい授業になってしまった。子どもの希望は尊重しながらも、本時のねらいにせまるために、1曲は落ち着いて歌える曲にさせるなどの指導性を示すべきであった。また、聞く態度ができていないものだから、リズム打ち・歌唱・身体表現など教師サイドで、よいと思われる子どもへの評価はあっても、児童相互で聴き合ったり見合ったりして評価し合うという場は、設定することができなかった。

したがって、子どもの中の音楽的な反応や表現に対して、できるだけ肯定的な評価を加えたつもりであるが、それが十分なものであったという自信もないし、個が生きているということにどれくらい通じたかを客観的に判断することは、残念ながらできない。

ただ、子どもが「楽しかった」・「またやりたい」という活動をできるだけ多く繰り返すことが、表現を豊かにし、そこに表現の違いや発想のちがひ・よさというものを生むことにつながるのではなかろうか。「つのだせ やりだせ……」のところは、おおきくうたったほうがいい。といった子どもの発言は、そのような現れであると考えられる。

かたつむりの教具など、視覚に訴えるものは、低学年の指導には大変有効である。しかし、子どもの歌によって、目を片方ずつ出すなど利用の仕方をもっと配慮すべきであった。特に、目が光ったことは、子どもに「おもちゃ」のイメージを抱かせてしまい、せっきくの教具も教師のねらいと、ずれて働いたことも、深く反省している。

個々の子どもが、集団と関わりながら、感じ方や表現を認め合い深め合っている授業には程遠いが、教師の評価、個と集団の関わり合う場作りなどを通して、個が生きている授業のあり方について今後とも研究を深めていきたい。